

いと小さき者から

【聖書】 ミカ書5章1節

エフラタのベツレヘムよ お前はユダの氏族の中でいと小さき者。 お前の中から、わたしのためにイスラエルを治める者が出る。 彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる。

マタイによる福音書2章1～8節

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。『ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で 決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせしてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。

【序】 大きくなろうとする誘惑

先週の新聞には徳洲会病院グループの徳田理事長一族あげての衆議院議員選挙違反が、連日にわたり大きく取り上げられました。今から40年ほど前に鹿児島県南の島々に、救急医療を十分に施す病院をと叫んで徳洲会病院を建てようとした若い医師徳田虎雄さんの報道を読んだ記憶があります。その徳洲会病院グループが今日では、日本全国に350施設、医師職員27000人の巨大なグループになっていたとは、驚きました。

病院の設立には県庁の認可が必要です。若い医者が県庁に申請に行っても課長の応対どまりで、地元の医師会の反対にあうと認可がおりません。政治力の必要を痛感して、徳田さんは鹿児島県で衆議院選挙にうって出て、3回目にやっと当選しました。すると県庁に行ってもすぐに知事と面会でき、病院認可もスムーズにいくようになったのだそうです。こうして病院の発展のための衆議院の議席確保が息子にも受け継がれ、組織上げての選挙活動が継続されてきたのでした。

さらに選挙活動には建設・設備業者も動員されたと報道されました。一つの病院開設に80億円かかります。不況の中でそのような工事に参加できることは、業者にとって大きな助けです。こうして徳洲会の威力は広がっていったのでした。徳田一族の利得は膨大だと報じられていますから、いずれ経理の不正にも捜査が及んでいくでしょう。徳洲会グループが大きくなるほど、全国の医師会との軋轢も大きくなります。ますます政治家たちの間に支持を拡げていく政治力が必要になります。良い医療の普及をとという若い医師の理想と情熱から始まった徳洲会病院の働きが、力が増すにつ

れて悪にまみれた組織に成り果ててきたとは、本当に残念であり、また恐ろしいことです。

[1] 預言者イザヤとミカ

今日の聖書は旧約聖書の預言書の一つ**ミカ書**です。ミカは、サマリアを都とする北王国が紀元前721年にアッシリヤに滅ぼされるという歴史の激動期に、あの大予言者イザヤより少し遅れて南王国で預言者として働きました。イザヤは**貴族**の出でエルサレムの都で活動しましたが、ミカはエルサレムから南西40kmのモシェレト・ガトという農村地帯出身の**庶民**でした。ですから貧しく虐げられた人々の立場から、都に暮す権力を握る豊かな者たちへの神の裁きを語りました。

ミカから100年後に、**エレミヤ**がエルサレムの神殿で神の裁きを語り、**死刑**にされようとした時に、幾人かの長老たちが立ち上がり、預言者ミカの名をあげてエレミヤを弁護しています。エレミヤ書26章17節以下を紹介いたしましょう。

この地の長老が数人立ち上がり、民の全会衆に向かって言った。「モレシエトの人**ミカ**はユダの王ヒゼキヤの時代に、ユダのすべての民に預言して言った。『万軍の主はこう言われる。シオンは耕されて畑となり エルサレムは石塚に変わり 神殿の山は木の生い茂る丘となる』と。ユダの王ヒゼキヤとユダのすべての人々は、彼を殺したであろうか。**主を畏れ、その恵みを祈り求めた**ので、主は彼らに告げた災いを思い直されたではないか。我々は自分の上に大きな災いをもたらそうとしている。」

地方の庶民の一人であるミカでしたが、彼の預言は**100年後**にも、このように心ある人々の間に覚えられていたのです。憲法記念日を迎えた今年の5月5日に、私はイザヤの有名な預言から「**剣を鋤に 槍を鎌に**」と題して説教をしました。イザヤ書2章の預言です。

「終わりの日に 主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち どの峰よりも高くそびえる。国々はこぞって大河のようにそこに向かい 多くの民が来て言う。『主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう』と。主の教えはシオンから 御言葉はエルサレムから出る。主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし 槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず もはや戦うことを学ばない。」

イザヤのこの素晴らしい預言は、そのままミカ書の4章1節以下にも記されているのです。この預言は、ミカがイザヤから聞いて語ったのでしょうか。イザヤがミカから聞いて語ったのでしょうか。関根正雄先生は別の**預言者の言葉**を、二人がそれぞれ引用したのだらうと解釈しています。いずれにしても、**世界の究極の平和**を、このように民に語った預言者ミカは、イザヤと共に優れた預言者でした。

[2] 終わりの日の約束

神さまが創造された世界は、悪のない楽園でした。楽園の中央に**命と善悪を知る木**とが一体とな

って植えられていました。神さまはこの木の実だけは食べてはならないと、園を管理する**アダム**にお命じになりました。**善悪の判断は神が下す。命は神が与える。**人が勝手にしてはならないという、神さまの命令です。そうです。**善悪の基準は一つでなければなりません。**人がそれぞれ自分で善悪を決めるから、人によって善と悪が異なり、そこで衝突、争いが起こるのです。命も人が勝手にしてはなりません。

しかし**アダム**と**エバ**は禁じられていた木の実を食べてしまいました。**アダム**と**エバ**の家庭に兄が弟を殺すという殺人事件が起こりました。**楽園は失われてしまったのです。**神の創造された世界が、今日このようになってしまったのです。預言者たちは、人の犯す**数々の罪**と**神の裁き**を厳しく預言します。滅びを語ります。しかし同時に、**歴史の究極**、終わりの日に神さまが備えておられる**平和**をも明らかにしました。それが**イザヤ**や**ミカ**が語った「**終末の平和**」、「**終わりに日の約束**」です。

ここで示されているのは、世界中の人が、**主が示される道を歩もうとして、神さまの許に集まって来る**ということです。神さまが善悪を示して、争いを裁き、戒めてくださるならば、戦争で決着をつけることがなくなります。剣も槍も核兵器もいらなくなります。皆で生産に励み、仲良く分け合い助け合って暮していけます。皆さん、このほかに**究極的平和の道**があるでしょうか。

そこで大切な課題となるのが、では**神さまの御心**をどのように聞き取っていくかです。**イザヤ**は「**エッサイの株から一つの芽が萌えいで、その根から一つの若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる**」という言葉で、**ダビデの子孫**から、弱い人のために正当な裁きを行い、貧しい人を公平に弁護する**平和の主の誕生**を予言しました(**イザヤ 11:1~10**)。一方**ミカ**は、「**エフラタのベツレヘムよお前はユダの氏族の中でいと小さき者。お前の中から、わたしのために イスラエルを治める者が出る**」(**5:1**)と予言したのです。

エフラタは**ベツレヘム**の古い名前です。ですから昔は**エフラタ**と呼ばれた**ベツレヘム**と言うことです。**ダビデ**王の出身地です。ユダヤの人たちにとっては、世界を救う**救世主**は**ダビデ**王のような方と思う人が多かったのでしょう。人々は**ダビデ**王の子孫からということで、**ダビデ**の輝かしい栄光を期待しましたが、しかし**イザヤ**の預言は、**弱い人、貧しい人を正義と公平で守るお方**でした。また**ミカ**の預言では、ユダの氏族の中で**最も小さい者**という視点で**ベツレヘム**が選ばれ、**平和の王**が生まれ出ると、予言されたのでした。

こうして、世界に究極の平和をもたらす王は、**世の貧しい者、弱い者を守るために、最も小さな町から誕生するお方**という神さまの御心が、預言者**イザヤ**、預言者**ミカ**を通して示されたのでした。

[3] 権力者の実の姿

私たちは、来月になりますと**イエス・キリスト**のお誕生を祝う**クリスマス**を迎えます。東の国の占星術の学者たちが、不思議な星の光に導かれ、ユダヤに新しい王が誕生したと信じて、エルサレムの王宮を訪れました。ヘロデは王である自分の他に、新しい王が誕生したとすれば、それは**救世主メシ**

アに違いないと思い、祭司長や律法学者たちに尋ねました。彼らは直ぐに聖書から、「それはベツレヘムです」と言って、ミカの預言を示しました。これほどミカの預言は、ユダヤの人々にしっかりと受けとめられていたのですね。

博士たちは、再び星に導かれて小さな町ベツレヘムへ向かい、貧しい馬小屋で誕生したイエス・キリストをひれ伏して拝み、黄金・乳香・没薬の贈り物を献げて、喜びにあふれて帰って行きました。しかし聖書のミカ書によって、キリスト誕生の場所を確認したヘロデ王も祭司長や律法学者たちも、そのまま都の王宮や神殿に留まって、**貧しい救い主の誕生**を拝もうとはしなかったのです。それどころか、ヘロデ王はベツレヘムとその周辺で誕生した2才以下の男の子を殺しています。祭司長や学者たちは、やがて成長して**神の国の到来**を宣べ伝える救い主イエス・キリストを、神を冒瀆する危険人物として逮捕し、十字架にはりつけて殺してしまいました。これが**権力者の実の姿**なのでした。この世の権力者たちは、手に入れた権力、特権をいつまでも持ち続けることに汲々としてます。自分の地位を脅かす者は、権力をふるって打ち倒し、我が身の安泰をはかります。これでは、争いが絶えません。平和はもたらされません。神さまが世界を創造された時、この世界は楽園でした。神さまが善悪をお裁きになり、皆はそれに聞き従ったからです。**全ての者が皆、神さまの裁きに聞き従う**——これこそが**楽園の原則**です。

ですから、イザヤもミカも**究極の平和**は、世界中の人々が、**主の示される道**を求めて集まって来る。そして主が争いを裁き、強い国を戒められる時、「剣は鋤に、槍は鎌に打ち直され、戦いはなくなる」と語ったのでした。では、**神さまの裁き**とは、どのようなものなのでしょうか。

[結] 天国をつくる心

イエス・キリストは、終わりの日に**天国へ迎えられる人**について、マタイ福音書25章34節以下で、こう語られました。『さあ、わたしの父に**祝福された人**たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの**最も小さい者の一人にしたのは**、わたしにしてくれたことなのである。』

報いを求めず、**最も小さい者**に食べものを与え、一杯の水を飲ませ、宿を貸し、着物を分け与え、病床を見舞い、故なく牢に入れられた人を慰めた人が、**天国**に迎えられます。イエスさまは、この世の最も小さい者を**私の兄弟**とおっしゃいました。私たちの世界では、小さな者、弱い者は見向きもされません。力ある者、大きな者ほど大事にされます。理想に燃えた若き医師徳田虎雄さんも、必死になって衆議院議員という権力者になり、重んじられて、徳洲会病院を350も全国につくる大

物になりました。そして75才の今、事業を大きくすることで**身に負ってしまった悪**を、裁かれる身となったのです。

天国を備える神さまの御心は、**最も小さい者、弱い者を大切に**し、共に寄り添って生きていく心こそ**天国をつくる心**だとおっしゃっておられるのです。ですから最も小さな町ベツレヘムを選んで、救い主を誕生させたのです。貧しいナザレの大工の息子イエスとして成長し、貧しい者、弱い者の友として福音を語り、**権力者の悪に負けて十字架に殺されながら**、天国を創り上げる**神の愛の勝利**、本当の平和への道筋をお開きになったのでした。

この世の最も小さい者、弱い者の中に、**世界の平和がある**のです。神さまはクリスマスを通して、最も小さい者、弱い者こそ大切にすることから、世界の平和を創りだしていくようにと、訴えておられるのです。最も小さい者を**わたしの兄弟である**とおっしゃる神の子イエスさまのお言葉・**天国をつくる心**を、私たちの心にしっかりと受けとめて、自分の人生を選び取り、生きていき参りましょう。

完